

# 耕作放棄地で就労訓練

## 21日 宇都宮に開所

### 食用ホオズキなど栽培

### 「授産所より高収入」目標

宇都宮市内の耕作放棄地を活用し、障害者らが農業を通して就労訓練を行うソーシャルファームが21日、開所する。市場で注目されている食用ホオズキをはじめ、値崩れしにくく付加価値の高い農産物を栽培するなど企業経営の手法を取り入れ、将来的には高齢者の雇用創出も目指す。運営団体は「利用者が農業技術を身に付けて自立し、耕作放棄地をよみがえらせてくれれば」と期待する。



訓練所を訪れ、苗木に肥料をまく利用希望の体験者ら

**ソーシャルファーム** 1970年代、イタリアの精神科病院の患者が職員とともに企業を設立したのが始まりで、欧州に約1万社ある。公的な福祉施設は予算などの制約があり、一般企業の雇用にも限界があるのに対し、その二つを融合した「第3の職場」と呼ばれる。

訓練所「ソーシャルファーム長岡」（宇都宮市長岡町）は、市中心部から北へ車で約20分の距離に位置する里山にあり、約260㍎の農地や山林が広がる。水が引きにくく生産性が低いため、約25年前に作物が作られなくなった。地主の一人、石川栄作さん(49)は「耕作放棄地にしてしまった土地を何とかしたい、と悩んでいただけにうれしい」と話す。

訓練所を運営するのは、授産施設や障害者らが働く工場に携わってきたスタッフら。農業経験者の指導のもと、最近イタリア料理で注目されている食用ホオズキや、スナックエンドウ、ブルーベリーなど約60種の苗木を育成し、利用者の希望や土地にあった作物の栽培を行っている。

時間や生産性が問題となる工業と違い、農業であれば手間と時間を費やして減

農薬で育てた作物には付加価値がつき、高く売ることができる。菊地章夫施設長(51)は、「農業は人を選ばない。短気な人、根気強い人、それぞれにあう作業がある」と説明する。

サシバやフクロウが生息する豊かな自然が残る山林を生かして、養蜂にも取り組んでいる。菊地施設長は「国産ハチミツは外国産に比べて高値で取引されるので高収入を狙える」と言いつつ、利用者が得られる工賃は、一般的な授産施設で月当たり2万円以下程度なのに対し、月3万円を目標としている。

また、人気を集める有機野菜の宅配サービスに着目し、インターネットなどで独自の販売ルートを開拓することも構想中だ。菊地施設長は「一度注文してまた食べたいと思ってもらえる野菜や商品を打ち出せば、訓練所ではなく一企業として、障害を持つ人や高齢者たちの働く場となれるはず」と意気込む。利用者(定員20人)を募集中。問い合わせは、028・680・6612へ。